

# 勝負谷1号墳

発掘調査概報

1974.3

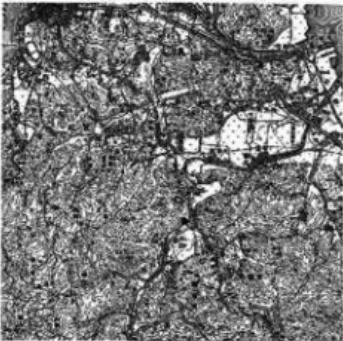


島根県八束郡八雲村

## はじめに

本古墳の所在する丘陵が県道松江一広瀬線付替工事によってその路線内に含まれることとなったので以前から知られていた勝負谷古墳群のうちその一基（1号墳）を事前に調査して価値を判断するために発掘調査を行った。調査はトレンチを古墳の南北と東西に入れ墳丘の状況を知った上で全面発掘にふみ切る体制をとった。

昭和48年7月20日に測量を開始し7月23日に敵入れを行ったが、意外に地形測量に手間どり発掘そのものの日程はおくれた。その間人數の関係もあって、思うような調査にはならなかったが、主體部の確認と墳丘の築成状況を知り得たので、墳丘の $\frac{2}{3}$ を削るにとどまったが、7月29日に調査を終えた。



古墳遠景

## 位 置

本古墳群の位置は八東郡八雲村大字日吉354番地の山林で、意宇川の西岸にあたり、八雲村の中心部をなす低地の西側を流れる意宇川が大きく東に屈折する部分にあたっている。かつてこの附近から石器が出土したと伝えられており昭和47年5月の分布調査の際にかなり精査したが土器片その他を谷及びその前面の水田から検出し得なかった。のちに丘陵上の樹木が伐採されて本古墳群が確認されたわけで、今回調査を行った1号墳(方墳)と2~4号墳(円墳)が東にのびる尾根の支脈上に分布している。伝承によると1号墳の南部にはかなりの広さの平坦部があるが、これはかつて宅地となっていたものようである。2号墳以下の円墳はこの平坦面より上部にあって次第に階段状をなして尾根の高所にいたっている。なお1号墳は尾根の先端部が突出して巾広くなつて北面する部分に位置しており、水田面と比高は約20mばかりである。

この古墳群の附近にはかなりの古墳群や横穴が存在し、八雲村の入口には小円墳によって構成される神納古墳群や中裏手山横穴があり小谷をはさんで方墳二基から成る古墳群があつて意宇川西岸の尾根上にはいたるところといって良い程に古墳群が存在している。

また東岸には標高156mの雨乞山があるがその北側の標高150m附近に横穴式石室を内部主体とする二基の円墳から成る大谷古墳群があり、更に小低地をこえて西百塚古墳群がある。またこの山の南麓にあたつてかつての交通路の要地には八雲村最大の雨乞山古墳があり石棺式石室を持つ古墳として注目される。これらの古墳群や古墳は雨乞山古墳を除いていずれも10m程度高さ1.5~2mの規模の小古墳であるが、古墳時代中期以降の村落古墳のあり方を知る上で貴重な資料となるものといえる。方墳の数は極めて少いが、これらの古墳に混じつてい方墳の年代を知る上でも本古墳の調査は一つの意義を有するものであった。

( 東森市良 )



勝負谷1号墳の立地

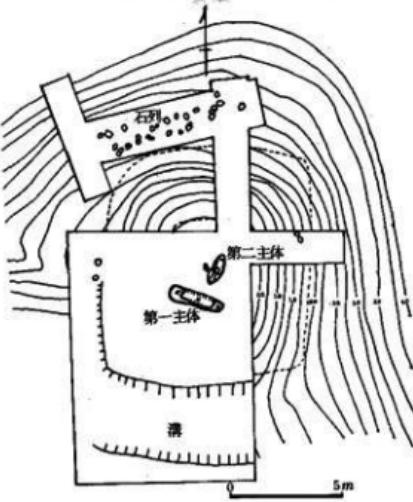
## 墳丘

墳丘は平面ではやや隅丸の方形をなす  $10 \times 11\text{m}$  の長方形で上部に  $3.5 \times 5\text{m}$  の平坦面があり、南北が長くなっている。これが地形の制約によるものであることは、全体的に地形が北方に突出した部分にあたることからも明らかである。墳丘の築成の状況は地山を整地したのち土を盛っており、トレンチの所見によると北及び東に地山が傾斜している。それは南北トレンチにおいて北で  $2.2\text{m}$  ぐらいの盛土が南では  $7.0\text{cm}$  程度となっており、東西トレンチにおいては西で  $6.0\text{cm}$  の盛土が東では  $7.0 \sim 8.0\text{cm}$  と下っていることによって示されている。

盛土は石やブロックを多く含み、中央部では  $2.0\text{cm}$  の表土の下に帯状のバンドを含みつつ  $6\text{cm}$  にわたって築みあげられた粘土質の土があって、その下に厚さ  $1.0 \sim 1.5\text{cm}$  の黒色土がみられ、その下は褐色土で  $4.0\text{cm}$  程度軟質の粘土層があって、礫を含む赤褐色粘土層に移行する。この褐色土層以下がかつての地山であり、黒色土層は古墳築造前の旧表土にあたる腐色土層である。

なお、地山の傾斜とあわせて東西の場合さほど地山層の上下はみられなかったが、南北では中心点より南に  $5\text{m}$  ばかりのところから溝を掘っており幅  $4.5\text{m}$  あってこれによって南の高い部分との区別をなしている。この溝は明らかに区別のためのものであって自然傾斜を区切っており、墳丘全体にめぐるものではない。

北側の墳丘裾には、中心より北  $6\text{m}$  附近で高さが  $2.8\text{m}$  下がったところに自然石を用いた列石群があつてここで自然の傾斜との区別がみられる。また、西側はあまり明瞭ではなかったが東側はやはり必ずしも同一レベルとは云えないものの墳丘裾に



勝負谷1号墳構造配置図  
×印は埴輪円筒



あたる部分に点石が認められた。

このように墳丘を画するにあたって南は丘陵を切断して溝を掘り、北は石を並べて自然傾斜と区別をし、列石はこの北側で大型の石を用いて直線状に並らんでいて注目された。

従って、この古墳の墳丘は地山をある程度ならして旧表土を削ることなく、西及び特に南に溝を掘り、土を盛りあげて南で 7.5 cm、北で約 2.5 m の高さとし長方形の墳丘をつくりあげたと考えられる。

( 東森市良 )



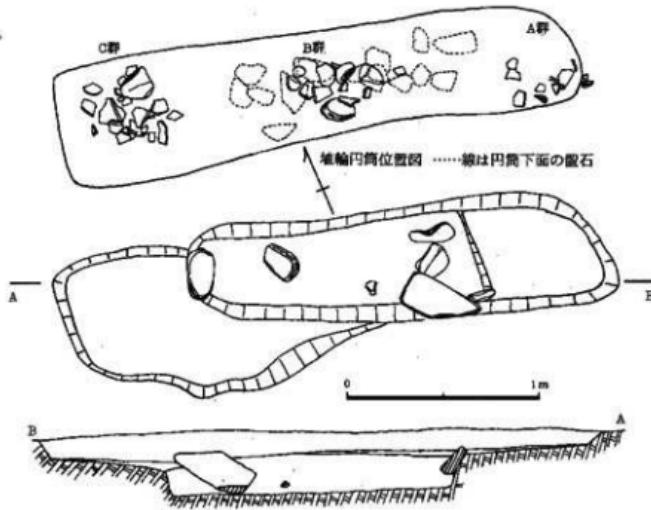
古 墳 近 景

## 内部主体

東西トレンチ南壁に幅40cm、深さ20cmの落ち込みがみられ、これをのちに第2主体と呼ぶこととなった。また、南北トレンチ西壁に埴輪円筒片の密集部分があり、これを拡張したところ三箇の埴輪円筒が直線的にほぼ1m間隔で並びその範囲は2.7m×60cmの小判形となった。これを掘形に注意しつつ掘り下げたところのうちに埴地の上面と判断した部分から円、角礫が群集している状況となりその下に長さ1.5m、幅50～60cm、深さ32cmの墓塚が現われた。これを第1主体とした。

第1主体は上述のごとく埴輪円筒を並べた塚の中に更に長方形の墓塚をうがっており、内部からは置石の他に埴輪円筒片、土器器高杯の脚部を検出したが副葬品は認められなかった。第1主体の作り方はまず盛土の中に塚を掘り木棺を直葬したのち山、川石を積み土を盛りその上にやゝ大き目の塚を掘って埴輪円筒三個を立てたもので円筒の上部は表土面に並んでいたものである。それは三個ともに上部が消失したり破片となって並んでいることによって明らかである。埴丘裾からも盛土にまじってかなりの埴輪片が出ているがこれと主体部に置かれた埴輪円筒との関係は不明である。

第2主体は第1主体に直交するように掘られており不整小判形で長さ1.5m、

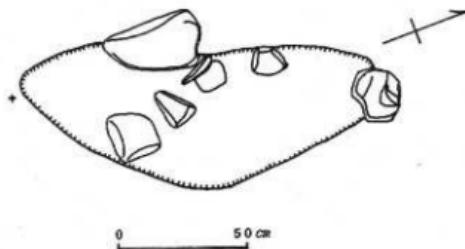


第1主体実測図

幅 50 cm あった。これも第 1 主体と同じように盛土に墓壇を掘り棺を直葬し 7 個以上の自然石を積んでいる。しかし第 1 主体のように長方形をなさず、浅い部分にうめられており埴輪円筒もともなっていない。第 1 主体との切りあいの関係もみられないが以上の状況からしてまず第 1 主体が葬られたのちおくれて第 2 主体が葬られたものと思われる。

以上はいずれも墳丘上部の平坦面中央部において検出したものであるが、その他の遺構は他の部分の調査においても認められなかった。

( 東森市良 )



第 II 主体実測図



第 I 主体の積石



第 I 主体の墓塚

## 遺 物

本古墳関係の遺物はきわめて少ない。直接棺内に被葬者とともに埋納された副葬品はないが、土塚上に一列に置かれたと思われる三個体分の埴輪片と供獻用の土師器壺の出土をみた。

なお、古墳墳端および塹内に転落した埴輪片と混って土師器壺の破片および黒曜石片が遊離検出されたが、本古墳との関係は認めがたい。

### 高 杯

二個とも脚部のみ残存していた。両者とも脚の裾は極端に広がる形で、器外表は丁寧になでられ、内面上部はヘラ削りで調整されている。

胎土は密で、色調は黄褐色および赤褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

器形の特徴からして、中期によく見うけられ、山陰に於いて古式須恵器の出現期前後に比定される。

### 円筒埴輪

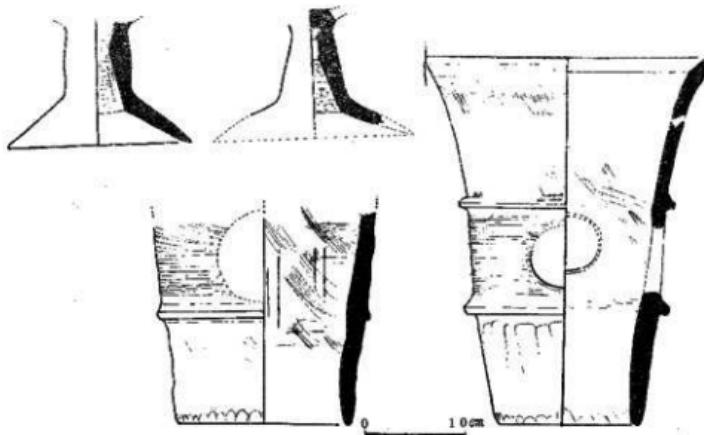
土塚上面に三カ所、群集して検出された。これらを東方より A、B、C と呼ぶこととする。これらの破片中基底部が圧倒的に多く、かつ C に於いては接合で基底部がほぼ復元できたことは、埋葬當時三個の埴輪が原位置に建てられていたことを裏付ける。

さて、三個中ほぼ復元可能な C と胸部まで推測できる B について特徴を記すこととする。

### (埴輪B)

埴輪 B の胎土は石英長石の砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は黄褐色を呈す。

基底部は下底径 16.6 cm、下段までの高さ 10 cm、表面は一度刷毛目



出土遺物実測図

を施した上を、なで仕上げを行っているが内面は下底に凹凸が著しく不整形面を残す。

胸部はタガの部分での径 2.0 cm、器壁の厚さは 1.5 cm である。タガの断面形は、角がやや丸みをおびた台形をしめし、指圧によって本体に張りつけられている。なお透孔は不明であるが、小片中に円形孔がみられるので形は円形である。器表は荒い刷毛目による調整が行なわれている。

(埴輪C)

C は下部はほぼ復元可能であったが、上部および口縁部片はわずかしか残っていなかった。

胎土は、きわめて密で細微な石英片を含み、焼成は良好で色調は赤褐色を呈す。

基底部は下底径 1.4 cm、下段タガまでの高さ 1.1 cm、表面は一度刷毛目が施された上からヘラで削って仕上げている。内面はヘラで削った上からナデ調整が行なわれている。

胸部は、タガの部分での径 1.8 cm、器壁の厚さは 1.5 cm、タガとタガの間は 9 cm である。

一段目のタガの断面形はやや円弧状、二段目のタガは鋭い稜線を有する台形を示し、指圧によって本体に張りつけられている。透孔は円孔で前後二個ある。

器表は細かな刷毛目による調整が行なわれ、内面は刷毛目を施した上をナデ仕上げしている。

口縁部は、径 2.8 cm でやや外反し、器表は口縁部より下 4 cm までは横ナデ、それ以下は斜めに細かな刷毛目による調整、内面はナデ仕上げである。

(西尾克己)

## まとめ

本古墳の立地はすでに述べたが、八雲村においては入口の部分にあたっており、尾根上に点在するようにして古墳群が存在するその一つであって、群集墳としての密度は低く殆んどが敷基をもつて一群を構成している。そして多くが円墳であり時期的にも古墳時代の後期、須恵器第Ⅲ形式以降のものを主とするのに対して、本古墳は方墳であり須恵器をともなっていない点でも注目される。

また、出土遺物は極めて少なく、まとまった土器の供獻は認められなかつたが、盛土上面及び墓地内の埋土にまじって出土した高环は葬送儀礼との関係を考えしめるものがあり、須恵器出現前後の特徴をそなえていて大東町の大東高校校庭遺跡出土品や松江市の薬師山古墳出土品との関連を考えしめるものがある。

なお、埴輪円筒片がかなり墳丘裾などからも出土しているが、特に注目しておきたいのは、墳丘中央部第1主体上面に埋置された三個の円筒列であつて、墓塚を掘り遺骸を埋葬したのち石でそれをおおい土を盛りその上にあたかも墓塚を標示するかの如く並べられている。これは、墓域を示すという大規模古墳にみられる埴輪円筒の用い方と異なつた、小規模古墳における特殊な葬送儀礼のあり方を示しているものといえよう。このような例はいまのところ山陰ではみられず、横穴の入口に1本の埴輪円筒を立てる例がそれに近いとも云えるが、今後本古墳のような類例のふえることをまってあらためて古墳における葬送儀礼を考えてみたい。

以上のような状況からして本古墳は八雲村ではじめて確認された中期古墳であること、2~4号墳が須恵器をともなう円墳であることとの関連性が注目されること、意宇平野の特徴である方墳の伝統が八雲村入口附近にも及んでいることなどから、小規模古墳ではあるがその意義の大きいことを評価しておきたい。

(東森市良)

### <付記>

この概報は調査に当ったものの検討会における意見を西尾克己と東森市良がまとめたものである。



調査後の墳丘

## 調査関係者

発掘調査主体者 八雲村長 石倉千代司  
発掘担当者 日本考古学協会員 東森市良  
調査補助員  
島根大学学生  
西尾克己 増田進司 植柘早苗 竹井巖 加藤悟郎  
松浦英一 米原邦登 上谷和司 藤原一三 能登律安  
国学院大学生 松本岩雄  
作業員 石倉恒勇 石倉剛 日吉百合子  
事務局 八雲村教育委員会事務局  
調査協力者 島根大学考古学研究会  
八雲村文化財保存協会

昭和49年3月15日印刷  
昭和49年3月30日発行  
勝負谷1号墳  
編集 東森市良  
発行 八雲村教育委員会  
八雲村文化財保存協会  
印刷 松栄印刷有限会社